九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

尾道学と亀山士綱『尾道志稿』

荒木, 正見
比較思想学会福岡支部長 | 文京学院大学教授

https://doi.org/10.15017/26540

出版情報：比較思想論輯. 16, pp.1-9, 2009-03-31. 比較思想学会福岡支部
バージョン：
権利関係：

尾道学と亀山士綱『尾道志稿』

荒木　正見

この論文は、「尾道学」の先駆者のひとり、亀山士綱によって文政八年（一八二五年）に刊行された『尾道志稿』により、「尾道学」という学問成立の可能性とその方法について論じるものである。なお、後述するように、この論文は拙論「菅茶山『福山志料』の視点　―場所と間柄―」（梅光学院大学地域文化研究所紀要　第二三号、二〇〇八、五一頁～五九頁）と対を成すものである。

筆者は、二〇〇三年九月に『尾道学と映画フィールドワーク』（中川書店、鈴木右文共著）を編著刊行し、最近それが「尾道学」の名の起こりであるかのように伝えられていることを知った。浅学の筆者ゆえ、その真偽は不明であるが、たしかに尾道全体を単に物理的な意味にとどまらず歴史的総合性をもって広く深く学問の対象として、その豊かな意味を明らかにしたいという意図で「尾道学」を提唱したのは自覚するところである。僭越ながら、そこで期待される尾道学とは、次のような目的を持つものだといえる。

まず、その一方の中心軸は尾道の本質的意味を明らかにする所にある。そして同時に、他の中心軸は尾道の尾道らしい発展、すなわち実践的な可能性を探り実践するところにある。この二つの軸が共鳴しあってこそ真の地域学が成立することを、尾道研究という場で実現してみたいという意図がある。

実は、そのような意図を持ちつつも未熟な自己が「尾道学」を提唱することに恥じらいを感じ、一九九三年八月にその意図ではじめて刊行した『尾道という場所論―志賀直哉・小林和作・大林宣彦の風景―』（中川書店）には意識的に「尾道学」という呼称を用いなかった。しかし、その本が幸いなことに、アメリカ議会図書館（The Library of Congress）の委員会評価を経て同図書館機構に登録納入されるに至って（CALL NUMBER：DS897.0572 A73 1993 FT MEADE）、尾道研究の価値と責任を痛感し、その後も、「尾道学」を念頭において、論文を書き続けている次第である。

今日、「尾道学」は、尾道市立大学と尾道市、そして多くの尾道市民とが共同で企画し研究、公開、実践されていることを聞く。まことに喜ばしくすばらしいことだといえる。本来、尾道学は尾道市民が中軸となって深化発展させていくことにこそゆるぎない姿を持つものであり、筆者も今後とも尾道市民のかたがたに多くの教えを請うことを祈念するものである。

ところで、このような「尾道学」は当然のことながら、多くの先駆者が存在する。小論で取り上げた亀山士綱もそのひとりである。広島藩の命を受け、文化十三年（一八一六年）に脱稿したとされる主著『尾道志稿』は、まさに尾道学そのものといえる尾道に関する豊かな地誌である。それは、単に思いつきの調査や記録ではない。ひとつの学問

の方法を軸にした研究書でもある。小論では主に、その研究方法を探ることによって、「尾道学」の方法の一端を求めることとする。

なお、テキストは、昭和九年に刊行された活字復刻版、亀山士綱著、得能正通編『尾道志稿』（備後郷土史会発行）を用い、同書の旧漢字、旧仮名遣いは現代のものに直して引用する。

一　菅茶山『福山史料』の方法

『尾道志稿』に、亀山士綱の師、菅茶山は次のような序を寄せている（引用した荒木雪葉氏による書き下し全文は本誌縦一〇頁参照）。

まず、「尾道は、官驛の通衢（つうく）にして、海路の要津なり。ここを以てその名四方に聞こえ、知らざる者無し。然れどもその稱する所、民戸の富・魚鹽の利に過ぎず、殊にその江山の最も勝りて風土の最も舊きを知らざるなり。」（漢文原著＝『尾道志稿』序文一頁）と述べられるように、『尾道志稿』執筆の価値は、交通の要衝として知られている尾道が、景観、歴史とも優れていることを明らかにすることだとされる。

それに続いて、菅茶山が言及するように、このことは、単に偶然的に景観や歴史を著わしたというのではなく、かつて菅茶山が著わした『福山史料』との関連において考察されなければならない。

筆者は先に、拙論「菅茶山『福山志料』の視点　―場所と間柄―」（梅光学院大学地域文化研究所紀要　第二三号、二〇〇八、五一頁～五九頁）において、『福山志料』の方法について、些かの考察を試み、次のような特徴を有することを述べた。

① 資料については原典に忠実であること。（五二頁）

② 一般的な歴史資料における福山に関する記述を記すこと、福山独自の記録に関してはこれを詳述すること。すなわち、普遍的な記述態度と記述内容を重視しつつ、それを背景として個を浮かび上がらせようとする。また、そこで表現された個を詳述することで、個によって構成された普遍を限定するという作業を歴史的考察の中で行っていく。（五二頁～五四頁）

③ この②の方法は、前半は場所による個の限定、後半は個による場所の限定に相当し、西田幾多郎に依拠する哲学的場所論の方法と類比性がある。（五三頁）

④ 自然現象などにおいても、人為に配慮した記述が爲されている。（五四頁）

⑤ この④の方法は、和辻哲郎に依拠する間柄の概念の表現だといえる。この間柄の表現は、単なる地誌ではなく、その土地に纏わる文学、芸術面での、人間と、形勝気候などの関係表現として示される。（五五頁）

さて、以上のように示される『福山志料』の記述態度を目安として、『尾道志稿』の方法を検討すれば、菅茶山の弟

子として亀山士綱がいかに工夫したかが明らかになる。

二　『尾道志稿』における場所論的視点

前節②における場所論的視点のうち、普遍的な背景を記す点においては、『福山志料』で地球上の経緯から展開されるように、『尾道志稿』では、「尾道」という項目の表題下に「北極出地三十四度三十一分」（『尾道志稿』一頁）と緯度が記されている。当時としてこのような地球的視点は先駆的であることはいうまでもない。

さらに、尾道の場所は、「芸州広島より陸路十九里半、東にあり　海路二十五里」（『尾道志稿』一頁）と、中国地方の中心都市からの位置関係を記し、「尾道は御調郡に属し、東、福山領に接す。」（『尾道志稿』一頁）と徐々に、その位置関係を狭めて記される。このような方法は、普遍から個を浮かび上がらせるという、場所論的方法の一端を意味する。

また、その位置を「九州より江戸への街道、諸国往還の船舟かならす爰に収泊す。」（『尾道志稿』一頁）と動きの中で表現している。実は、この点が尾道にとって特徴的な点である。それは、上記④の人為に依拠する方法や、⑤の間柄の表現に関する表現に繋がっていく。

この『尾道志稿』では、以上のように尾道の位置関係を地理的に述べつつ、「尾道古名玉の浦」（『尾道志稿』一頁）と、歴史的な一語に言及するや、記述は、「万葉集」、「夫木集」、「前太平記」、「太平記」、「後太平記」、「道ゆきぶり」、「九州の道の記」、「海東諸国記」、「陰徳太平記」、「英草紙」、「玉浦記」、「芸備国郡志」などを広く引用して、文学、旅行記、地誌などにいかに豊かに言及されたかを示し、尾道を多角的に浮かび上がらせようとされる。

この意味については次節で詳述するが、この方法は、上記②③で述べた、個によって普遍を限定するという方法に相当する。

このようにして開始される『尾道志稿』であるが、巻之一では定石どおり公署、街市、畝高、戸口と述べられる。そして、それに続く、舟船、池、海、山、石は、尾道らしさを顕著にするものだといえる。

舟船は、「二百三十五艘」（一〇頁）とだけあるが、やはり人口九千四百八十八人（一〇頁）に比して、その数の多さ、また、記すべき必然性は、海に依拠する尾道の特徴である。

池は、三箇所の防火用水が挙げられている（一〇頁）。その久保町は尾道中央部の低地繁華街、正授院はやや東よりの平地、寶土寺はやや西よりの高地と、計画的にバランスよく配置されていることが看て取れる。

山は、高いところで標高三百メートル程度ではあるが、海から見上げれば姿かたちの美しさは格別で、前後で述べるように、古来、文学や紀行文の素材となってきた。と同時に、東に独立している浄土寺山、中央に連山を爲す西国

寺山、愛宕山、大山寺山、また、西に連山を爲す善勝寺山、千光寺山、持光寺山のいずれも、宗教的な山名を有する（一一頁）。実際、現地に赴けば、それらの山は地形学上の山というよりは、寺院の山名といったほうが良い程度の山である。しかしそれらがあえて山として記されるのが尾道の特徴である。

石については、千光寺山にある蓼蓼（とうとう）岩と、善勝寺山にある博樗（ばくち）岩とが挙げられている。後者は由来不詳とされているが、前者は古来有名な岩である。「土人ほんほん岩（ぽんぽん岩）と云。小石にて打けば鼓の音出ると云。」（一一頁）とあるが、まさにそのとおりで、今日も尾道水道を見下ろす岩の上に立ち、こぶし程度の小石で叩くと、なかに空洞でもあるかのごときぽんぽんと響く音がする。『尾道志稿』には、菅茶山がこの岩を素材に記した漢詩が記されているが、今日、この岩の側面に、この詩の一部が刻まれている。

このように、巻之一は、その性格上総論を述べる巻でありながら、普遍的総論と、尾道という個とが対応しつつ述べられている。

ところで、この『尾道志稿』に特徴的なのは、全十巻のうち、巻之三から、巻之七までが、塔寺すなわち、仏教の史跡だということである。これに、巻之二の廟墓、すなわち多くは神社、祠の類を加えれば、実に半分以上の章が、宗教的な史跡に費やされていることになる。しかも、その記述は、単に場所や由来を記すのみではない。

特に浄土寺に関しては、巻之三と巻之四の二巻を費やして（二〇頁～四八頁）、その歴史的経緯や所蔵物件とともに、寄進、法令などの資料や、足利尊氏が開いた歌会の歌などを微細にわたって紹介し、浄土寺の多面的価値を示している。それらの資料には、単に尾道に属する資料というのみならず、西大寺などとの交流を示す普遍的性格の強い資料をも含まれる。この地道な作業は、上記①の原典に忠実であることを意味するとともに、②のなかの個を豊かに表現することで、普遍的全体を豊かに限定する作業を意味している。

このように、その記述姿勢は、師の菅茶山を受け継いだものだといえるが、このような宗教的色合いの濃さは、『福山史料』以上のものがある。

それは、亀山士綱自身に起因することも考えられる。今日、信行寺境内、本堂より一段下の、山陽本線沿いの亀山家墓所の奥にある亀山士綱の墓所には、「亀山紀卿君碑」が建ち頼山陽の筆になる顕彰文が記されるが、そこに、「君の性、恬裕慈恤、善を揚げ悪を匿し、音問怠けず、屢（しばし）ば資を捐てて窮に振るまい、邑水乏しければ井を穿ちて泉を獲るを爲し、人呼びて萬年井と曰う。また廢井を渫うもの二。」（書き下しは本誌縦一〇～一一頁を引用する。）と記されるように、正義心と奉仕心の強い性格をうかがい知ることができる。たしかに、亀山士綱個人にそのような側面があり、その背景に信仰心があったことは想像に難くない。

と同時にやはり、亀山士綱個人にとっての普遍、尾道という土地柄に信仰心が厚いことも見過ごすことはできない。青木茂編『新修尾道市史　第六巻』（尾道市役所、昭和五二年）に、「尾道は寺院が多い、と誰もがいうが、実際常識以上に多かった。」「それは、尾道商人の財力がそうさせた」（『新修尾道市史　第六巻』四頁）と述べられているように、一七世紀初期には八一寺を数えたとされている（『新修尾道市史　第六巻』五頁）。広域合併後の今日でさえ一五万人を少し割る程度の人口の町としては密度が高いといわなければならない。

また、長江一丁目の慈観寺の逸話も著名である。当寺は豪商橋本家の檀那寺であり、墓域には橋本家ゆかりのもののみが葬ってあるとさえいわれるこの寺については「本堂は天保の大飢饉にさいし、時の橋本竹下翁が貧民救済のために、天保五年（一八三四）起工、同八年竣工したいわゆる慈善事業としての建築であった。」（『新修尾道市史　第六巻』（昭和五二年）七〇頁）とされるように、一豪商が、飢饉に苦しむ住民を救うために、単に施しをするというのではなく、信仰に基づく仕事を与えることによって、物心両面で救済をもたらしたものである。それがまさに本堂建設という宗教的な色彩を負っていることは注目される。

このような全体としての尾道の宗教的雰囲気が、亀山士綱個人に対して緻密な宗教施設の記述を促したといえる。

こうして、『尾道志稿』もまた、『福山志料』と同様、筆者なりの理解に基づく、西田幾多郎に起因する場所論の構図を保って記述されているといえる。

三　『尾道志稿』における人為的視点

先の④⑤に関する記述もまた、豊かに展開される。

まず、先にも言及した、「尾道古名、玉の浦」（一頁）として、「万葉集」、「夫木集」、「前太平記」、「太平記」、「後太平記」、「道ゆきぶり」、「九州の道の記」、「海東諸国記」、「陰徳太平記」「英草紙」、「玉浦記」等々、古今の文献を多く引用しているが、特に文学作品に類する引用が多いのは、先術の論文で述べたように、和辻哲郎が『風土』（昭和一〇年／昭和一八年）で述べたような、「他人において己れを見いだし、自他の合一において絶対的否定性に還り行く」「人間が風土において己を見いだすこと」（和辻哲郎『風土』岩波書店、岩波文庫、一九七九年／二〇〇七年、二二頁）とする「間柄」の概念との連関として考えることができる。

すなわち、ある土地に関して記述する行為は、記述者がある土地を自己の意識の中に閉じ込めることを意味するが、そのような自他の合一はまた、それぞれの独自のあり方を否定する行為でもある。文学作品は、客観的な風景の描写であっても、作者の意図をあらわにする機能を持つものとして言及される。反面、作者は、ある具体的な風景を描写することによって、その風景の普遍的な意味からは逃れられない。自分の思いを述べようとしても、ある具体的な風

景に言及する限り、どのように脚色しようとしてもその風景の現実からは限定されてしまうのである。

かくして、風景の描写は、人為的視点のもつ相互否定的作用の中に組み込まれていくことになる。上記、諸文献のことごとくがそのような性質を持つことはいうまでもない。そして、「玉の浦」という古名に言及するだけで、多くの文献を引用したことは、『尾道志稿』において、強くそのような視点を持つことを意味する。

このような人為的視点が最も純粋に表現されるのが、巻之九、「土産」、「風俗」の項である。

「土産」としては、「芸備国郡志」の記述として「尾道石」と「木綿蹈皮（たび）」とが挙げられている（九八頁）。また、正徳二年のものとしては「切石」、「雑喉鮓（ざこすし）」、「雑喉腸塩辛」、「丸編笠」、「刺足袋」、「酢」、「醤油」が挙げられている（九八頁）。また、享保六年のものとしては、「石細工」、「みかけ石」、「鍛冶細工」、「編笠小笠」、「刺足袋」、「雑喉魚鮓」、「小魚腸塩辛」、「阿伽陀圓」、「酢」、「ざぼん」が挙げられている（九八頁）。そして、今のものとして、「切石」、「雑喉鮓」、「鮴（めばる）塩辛」、「阿伽陀圓」、「刺足袋」、「飯（はまち）」、「鱶（ふか）」、「鱸（すずき）」、「鉄碇」、「編笠」、「線香」、「保命酒」、「帆」、「酢」、「渋」が挙げられている（九九頁）。これらすべてが尾道を髣髴とさせるものであるが、多くの魚や海産物は当然としても、特に酢や醤油といった醸造品、阿伽陀圓や保命酒のような薬などは、本来、文化が発展し、文物の往来が盛んな土地の特産であることを思えば尾道がいかに発展していたかが理解できる。

また、「風俗」は、正月から大晦日に至るまでの年中行事の具体的運営が、用いられる道具、食事に至るまで詳細に述べられている（九九頁～一〇五頁）。

これらの一連の記述は、尾道に視点を据えて、できるだけ詳細に述べようとする姿勢である。その詳細は、尾道という場所が、物理的な場所というのではなく、生活の場として生き生きと描かれている。

かくして、この『尾道志稿』においても『福山史料』と同様、「間柄」概念と連関する人為的視点を強く感じさせるものとなっている。

四　亀山士綱と「間柄」の実践、そして尾道学へ

先に、筆者は、菅茶山が「間柄」の実践者でもあったことを述べたが、すでに「亀山紀卿君碑」の碑文について引用したように、亀山士綱もまた、地域の、特に貧しい人や困ったことに関して尽力した実践者であった。

その実践の指針としてもこの『尾道志稿』はふさわしい書である。

それは第一に、本書は、尾道の本質をあらわにするものとして、まさに尾道の学、尾道学だからである。

すなわち第二に、小論で分析したように、その記述方法

は存在論的根拠に基づくものだからである。すべての学問の根底が存在論だということはいうまでもないが、場所論を援用して理解すればその記述姿勢が明確になったように、『尾道志稿』の根底には存在論が横たわる。

第三に、それは机上の空論ではない。ある地名をかぶせた学問を遂行する意思には、その土地を冷静に分析し研究する態度が必要なことはいうまでもないが、同時に、その土地とその土地に住む人や文物をあくまで愛し、親しく関わる姿勢がなければならない。このことは、一見、単なる感情論でしかないように見えるかもしれないが、学問の立場からそうではないことを述べなければならない。

すなわち、ある土地を調査しようとすれば厳密でより詳細な情報が必要になるが、その場合求められるのがフィールドワークという方法である。いうまでもなく、フィールドワークは、土地と、住民と文物との密接な関係、「間柄」がなければ成立しない。その関係、「間柄」は否定的関係や冷たい関係、また軍事上の強制などではなく、土地と、住民と文物の発展を願い実践する肯定的関係や暖かい関係であるほうがはるかに効果的だということはいうまでもない。まして、亀山士綱のように、自ら重要な立場としてそのまちで暮らし、そのまちのために尽くすことは、学問の方法という側面から言っても最もすぐれた仕方である。

もちろん、実践は学問のために行われたわけではない。それゆえにこそ、むしろ豊かな情報が手に入るのである。今日の自ら追及する尾道学も、かく無償の実践あってこそ成果が上がるものだということを肝に銘じて、今後の糧としたい。

さて、以上の考察から、尾道学を遂行する方法の一端が示されることになる。

はじめに情報収集を行わなければならないが、当面はすべての前提を抜きにして、ランダムなフィールドワークを行い、可能な限り緻密な情報を収集する。その際、参考にすべきはフッサールの現象学的還元(Phänomenologische Reduktion)の方法である。

周知のようにフッサールは、現象学的還元とは、「或る実在と思われる超越的な(transzendent)もの一般の排除」(Edmund Husserl, *Die Idee der Phänomenologie*, Martinus Nijhoff, 1973, S.9)と述べるように、すべての認識に伴う主観性を認めた上で、超越的すなわち客観的対象だと思われているものに対して、それらは、所詮主観に捉われているのだと自覚しそのように認識し直すことと規定する。

このことから、われわれが捉えたものをはじめから然々のものと規定することが思い込みの危険性を保持することが求められる。従って、その限りにおいて、情報は何の前提も無く、自分の意識に現れるがままに獲得しなければならないことが示されることになる。

小論第一節を省みれば、①の、原典に忠実であることがこの、主観性の排除に相当する。

しかし、もちろんそのままでは、単なる事柄の羅列に終わってしまう。そこではじめて求められるのが、探求目的

に応じた前提の設定である。「従って次に、さまざまな所与性(Gegebenheit)を、すべての変容に従って追求しなければならない」(Edmund Husserl, *Die Idee der Phänomenologie*, S. 13)と述べられるように、現象として現れているものの何かに対してそれがどのような姿を持っているかをあらゆる角度から研究しなければならないのである。すなわち、尾道学であれば、当然のことながら「尾道の探求」がそれに相当する。フッサールの叙述はこれに続いて「本来的な(eigentlich)所与性と非本来的な所与性、また、端的な(schlicht)所与性と綜合的(synthetisch)所与性、いわば一挙に構成される所与性とその本質に従って単に徐々に作り上げられる所与性、絶対的に妥当する所与性と所与性と妥当性の成立とを無限に高く獲得する所与性などを徐々に追求しなければならない」(Edmund Husserl, *Die Idee der Phänomenologie*, S. 13)と述べ、学の具体的遂行可能性を拓く。この「所与性」をそのまま「尾道」に置き換えれば即座に「尾道学」の可能性に相当することはいうまでもない。

小論第一節の②を省みれば、普遍的な尾道とそこに生じる尾道の個々の表現とが、③で述べたような場所論的な発想にも繋がるが、他方、ここで示される所与性との対比とも適合することが看取できる。すなわち、普遍的な尾道とそこに成立する個々の現象とを区別しつつ両立する考察態度が要求されるのである。

その場合に本質や普遍を見極める作業が要求されるが、ここで求められるのが②で述べたような歴史的理解である。

歴史的変容は、普遍と個の相互交流の軌跡である。歴史の流れを事実の羅列として捉えるのではなく、相互交流の必然性の軌跡として捉え直すところに、普遍が見えてくる。そこから逆算して、その普遍的な事象が成立する根拠を求める流れの中に、尾道の本質が示されることになる。

さらに、かく歴史的変容は好むと好まざるとに関わりなく、人間を焦点とした存在すべてとの関わり、間柄の歴史である。そのことに言及せざるを得ないことは第一節の④⑤で述べたとおりである。

そして最後に、菅茶山や亀山士綱が行ったような、「善き実践」である。この実践には、尾道の本質が中心軸になければならない。なぜなら、その本質から遠い実践は尾道に存在すべき必然性を失い、実りの少ないものになりかねないからである。また、あえて「善き」を付けたのは、世界を善くしていく意志の無い、自己中心的な実践は、結局は地域を滅亡させるからである。かつて尾道の方々が宗教的な背景の下に「善い」を追求し、その上に立ってさまざまな実践を行ったことは歴史に明らかである。宗教がすべてというわけではないかもしれないが、より普遍的にいえば、「善い」を探求しないと、結局は自らを滅ぼすことを悟ってきたのである。

もちろん小論を省みれば、真の「善い」は、さらに理念的には地域全体を超え、全存在へと向かう「善い」でなければならない。亀山士綱をはじめ、先述の橋本竹下、また、大正一二年に起工した尾道市の上水道工事に多額の私財を

寄付した山口玄洞、明治三五年に千光寺共楽園（現在の千光寺公園）を市に寄付した三木半左衛門など（尾道商工会議所編『瀬戸内の港町の歩みのあと　太平記から今日まで―尾道商工会議所百年史―』尾道商工会議所、平成四年、一八〇頁、一八三頁）、各種産業、行政、交通、築港などに尽くした人々を挙げれば枚挙に暇が無い。またこれほどまでの顕著な意志が感じられないまでも、文化人もそうとは自覚しないながらも尾道の名を広く知れ渡らしめ、尾道市民の自覚と誇りの材料を提供してきた。それらの人物としては、志賀直哉、中村憲吉、林芙美子、小林和作、大林宣彦などが挙げられる。

このように、尾道の多くの方々が現在もその意識を高く持っている。冒頭に述べた「尾道学」の試みもそのひとつである。また、産業構造の変化に苦心しながらも何とか尾道の同一性を新しい形で表現し、観光客を引き付けようとする努力は、中央商店街を歩いただけで明らかである。それらすべてが歴然と進展するからこそ、多くの人々を惹きつける尾道なのである。

かくして、亀山士綱の方法に即して、尾道学の可能性のアウトラインを考察してきたが、もちろん、これはほんの入り口でしかない。述べてきたすべてのことをいっそう深め展開することが今後の課題である。

これまでの尾道研究にお手伝いを賜ったかたがたに、心から感謝申しあげるとともに、豊かな尾道のいっそうのご発展をお祈りすることはいうまでもない。

直接利用した参考文献：

荒木正見編著・鈴木右文共著『尾道学と映画フィールドワーク』（中川書店、二〇〇三年）
荒木正見『尾道という場所論　―志賀直哉・小林和作・大林宣彦の風景―』（中川書店、一九九三年）
亀山士綱著、得能正通編『尾道志稿』（備後郷土史会発行、昭和九年に刊行された活字復刻版）
拙論「菅茶山『福山志料』の視点　―場所と間柄―」（梅光学院大学大学地域文化研究所紀要　第二三号、二〇〇八、五一頁～五九頁）
青木茂編『新修尾道市史　第六巻』（尾道市役所、昭和五二年）
和辻哲郎『風土』（岩波書店、岩波文庫、一九七九年／二〇〇七年）
Edmund Husserl, *Die Idee der Phänomenologie*, Martinus Nijhoff, 1973
尾道商工会議所編『瀬戸内の港町の歩みのあと　太平記から今日まで　―尾道商工会議所百年史―』（尾道商工会議所、平成四年）
［Way of thinking on “Onomichi Shikoh” by KAMEYAMA, Shikoh concerning Onomichi Study］
［ARAKI Masami, 文京学院大学人間学部教授、哲学・比較思想］